

54 アラブ医学で用いられている 蒸露剤の他地域への伝播

○中村輝子・遠藤次郎・海保房夫

現在では生薬中の揮発成分(精油)を得るために水蒸気蒸留を行う。しかしながら、かつては水蒸気蒸留によって得た水層部分を薬用にしていた。現在でもアラブ医学ではアラク(蒸露剤)という剤型をしばしば用いる。蒸露剤とは、生薬に水を加え、蒸留器に付して加熱し、生じた水蒸気を冷却して得た液体を濾過し、精油などを除いた澄明な水溶液である。

我々は既に中国ウイグル自治区における蒸露剤を調査し、その製造装置などについて報告した(薬史学雑誌、三巻、二〇四頁、一九九六)。今回は、アラブ医学に由来すると思われるこの剤型のヨーロッパ、中国、日本への伝播について、文献学的に検討した結果を報告したい。

メソポタミアから紀元前三五〇〇年のものと推定され

る蒸留器が出土していることからわかるように、蒸留は極めて古い技術である。アラブ地域では、アル・キンディー(八〇〇―八七〇?)、アッ・ラージー(八六五―九二五)の著作に蒸露剤が記されている。また、これは後世のヨーロッパに最も影響を与えたといわれるイブン・シナー(九八〇―一〇三七)の『医学典範』の処方中にも見られるが、同書では処方剤別にまとめられている中に蒸露剤の項は見当たらない。

ウルダング(二九五―)によれば、ヨーロッパに蒸露剤を最初に伝えた人はアーノルド・デ・ビラノバ(一二三五―一三二二)であるといわれているが、これについては改めて検討することとし、ここでは、我々が収集した一六世紀末から一八世紀末に出版されたヨーロッパ各地の都市薬局方、二二種における蒸露剤の盛衰について報告する。これらの中で蒸露剤の種類が極めて多く記述されているのは、一六世紀末から一七世紀初期のものにおいてであり、ロンドン薬局方第一版(一六一八)では単一ならびに複合の生薬から製した蒸露剤が二〇〇種類以上にのぼっている。一七世紀中頃から、蒸露剤の種類は減少

しはじめ、一八世紀に入るとその数は二〇〜三〇種類と著しく少なくなっている。

中国の文献における蒸露剤の古い史料は、これまでに我々が調べた範囲内では、『宋史』における「九四八年にアラビア人が薔薇水を献じた」などの記述である。また、『本草綱目』（二五九六）にも蒸露剤が記されているが、ここでは付随的に記されるにとどまっている（たとえば、茉莉の項で「原出波斯：蒸取液以代薔薇水」、など）。この製法を最初に紹介した書は、『泰西水方』（キリスト教宣教師、セバルチアン・ウルシス（熊三拔）著、一六一二）と思われる。ここでは蒸露剤を葉露と称し、蒸留が薬性に与える意義とともに薔薇、薄荷などを記している。その後、葉天士（一六六七—一七四六）、晩年の述とされる『外感温熱篇』に薄荷水の外用が見られる。また、『本草綱目拾遺』（一七六五）では、水部において「各種葉露」の項を設け、その中で「この方法が大西洋で始まり、中国に伝わった」と記し、金銀露など二二種類の葉露をあげている。

日本にはヨーロッパを介して蒸露剤が伝わった。初期の文献では、桂川甫筑（一六六一—一七一七）撰『養生室

医話』に「ア、クアシナモウミ（肉桂ノ水）」をはじめとする蒸露剤が認められ、「水薬」のもとには「デストレイルニ煎ス」と記されている。また、同書には「ヲ、リヨムカリヨヒロウロム（丁子ノ油）」などの精油も記され、その副産物として「油ヲ取タル跡ノ水」の薬効も記されている。その後、『三法方典』（一八〇五）、『和蘭薬鏡』（一八二〇）なども各々三〇種前後の蒸露剤を記しているが、全般的に見るならば、日本においては蒸露剤が積極的に受容されたとは言い難い。このことは、一八世紀のヨーロッパにおいて、既に蒸露剤の最盛期が過ぎていたこととも関連していると思われる。

（東京理科大学薬学部）